

あなたこそ神の聖者

ヨハネ 6 : 60 - 69



司祭 ヨハネ 井田 泉

2018年8月26日

奈良基督教会にて

イエスさまの公的な活動は、2年から3年と言われます。その短い時間の中で人々に与えた影響は、考えられないほど大きいものでした。ここに今日、わたしたちが集まって礼拝しているのも、そのせいです。

けれどもその2年ないし3年のイエスさまの活動はずっと順調であったわけではありません。イエスを愛し慕う多くの人々があり、反対にイエスを憎み迫害し捕らえようとする者たちがいました。そしてさらに、イエスを信じて従っては来ているけれども、中心は自分の側にあって、自分の欲求を満たしてくれる限りにおいてイエスに従う。しかしイエスが自分が期待していることに沿わなくなれば、イエスを見限って離れ去って行く——そういう類いの人々が大勢いました。それが今日の福音書に記されている事実です。

「ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。』」

ヨハネ 6:60

「このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。」 6:66

ここに起こったのはイエスの活動の危機です。せっかく祈り、苦勞して積み重ねてこられたものが一挙に崩れ去るかのようです。しかもイエスは、離れて行く人たちをも愛しておられましたから、その悲しみと失望はどれほど大きなものであったことでしょうか。

そこでイエスは残ったわずかの弟子たちにこう言われます。

「67 そこで、イエスは十二人に、『あなたがたも離れて行きたいか』と言われた。68 シモン・ペトロが答えた。『主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。69 あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。』」

彼らは踏みとどまりました。ここでペテロが皆を代表してイエスに言います。

「68 主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。69 あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」

冒頭は「主よ」という呼びかけです。ペテロの言葉は説明ではありません。祈りのような、深い思いの告白です。

第1の言葉。

「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。」

他のどこにも、ほかのだれの所にもわたしたちは行きません。わたしたちは、あなたと出会って神の恵みと真理を経験しました。ましてあなたがわたしたちを呼ばれたのではありませんか。わたしたちは自分の人生をあなたに託したのです。

第2の言葉。

「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」

イエスさま、わたしたちはあなたをとおして神の声を聞いて

きました。わたしたちはそれを食べるようにして、ここまでついてきたのです。それは永遠の命の言葉。それなしにわたしたちは生きることができません。

ふと思い出すことがあります。もう 30 年以上も前のことで、わたしが聖公会神学院に勤めていた時代です。当時 60 代、今のわたしくらいの年代でしょうか。信頼関係にあったある男性の信徒がおられました。いろいろと親切にしてくださいました。その方があるとき、ふと、こうもられました。

「年が進むと、どうもこれまで信じてきたキリスト教よりも仏教のほうにひかれる自分がある。」

わたしを信頼してくださっていたから、そのようにもられたのだと思います。それはまったくわからないではありません。

わたしの書斎からは興福寺の北円堂が見えます。北円堂の中に安置されている仏像の中に、^{むじゃく}無著と^{せしん}世親という二人の仏弟子の像があります。無著はあらゆることを経て悟りに達した、穏やかで平和な表情です。すばらしい。一方、世親は憤りの表情です。わたしは無著を理想と感じますが、まだ当分は世親に近いところにいたい。この世界の悪をしっかりと見つめていたいからです。

話を戻しますが、そのときわたしがどう答えたかは忘れませんでした。けれどもはっきり言ってその考えは違うのです。もしイエス・キリストにおいて神の恵みと真理を経験していれば、もし、

肉体は衰えていつかは滅びるとしても永遠に滅びない命を与えてくださるイエス・キリストを少しでも知っていたら、まったく違うはずです。

わたしは皆さまにお願いしたい。イエス・キリストから永遠の命の言葉を得てほしい。それを曖昧にしたままでいてほしくないのです。イエス・キリスト以外のだれが、わたしのために死に、わたしのために復活してくださったか。この方だけなのです。占いもありません。特別の修行もありません。ただこの方、イエスを知ってほしい。イエスから離れないでほしい。

第3の言葉。

「69 あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」

「神の聖者」。これはイエスの本質です。イエスはただ教師であるだけではなく、神の言葉を伝えてくれる方であるばかりではなく、神の聖者である。どういうことでしょうか。

神の聖者。同じことをイエスに向かって叫んだ人がいます。カファルナウムの会堂礼拝のとき、イエスさまが説教しておられる最中にひとりの男が叫びだした。

「ナザレのイエス。わたしにかまうな。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」マルコ 1:24

憎しみに燃えてイエスに反抗したこの人。汚れた霊に取り憑かれた男と記されたこの人は、この人と言うよりこの男に取りついた霊は、イエスの正体、本質をはっきり認識していた。イ

イエスが近づくと自分が脅かされる。イエスが語ると、隠していた自分の誤りや汚さがあらわになってくる。もう耐えがたい限界に来て、この男は叫ばずにはいられなかった。けれどもこの人は、この人を支配していた霊は、正しくイエスの本質を認識していたのです。その後、イエスはこの人から汚れた霊を追放してもらって癒されます。

「神の聖者」。別の言い方をすれば、イエスは神から来られた方、神の本質を持った方です。人はイエスをとおして聖なる神に出会う。

「聖なる」という言葉は、長いイスラエルの信仰の中で神の本質を表現する言葉です。イザヤか神殿で祈っていたとき、天使セラフィムは飛びかけ翔りながら「**聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主**」（イザヤ 6:3）と歌いました。「聖」とは、人間とは隔絶した清さです。その聖なる神をまともに見れば、人間は死ぬ。清くない人間は神の清さに耐えられないからです。イザヤはその神を経験した。そのときイザヤは唇を焼かれて、死ぬほどの経験をして、そして神に仕える預言者となったのでした。

ペテロたちはイエスの中に聖なる神を見た。ひれ伏すほかはない神です。自分のきたな汚さがあらわにされてしまいます。しかし弟子たちが経験したのは、聖なる方イエスが、自分たちを滅ぼすのではなく、自分たちの汚さを引き受けて、そして自分たち

を救い清めてくださる方であるということでした。

イエスのうちには聖なる火が燃えている。その火は、罪を焼き尽くす火、清める火。しかしそれは赦す火、愛の火です。

まだ弟子たちは十分にイエスのことがわかっていません。ほんとうにわかるのは十字架と復活を経てからです。にもかかわらず少数の弟子たちは、この時点ですでにイエスを聖なる方として経験して、信じていた。恐れつつ愛していました。自分の汚さが全部洗い清められて、まっさらになって、もはやおごることも何の虚勢を張ることも必要ではない。イエスに受け入れられ愛されている。純粹に生かされる喜び。それを残った弟子たちは知っていたのです。今それをはっきり告白します。

「69 あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」

祈ります。

主イエスさま、かつて多くの人たちがあなたから離れていったとき、少数の弟子たちが残ってあなたへの信仰を告白しました。どうかわたしたちも、何があってもあなたから離れることがないようにしてください。あなたの永遠の命の言葉と、わたしたちを愛し清めるあなたの聖なる火によって、わたしたちを清め純粹な者としてください。あなたを信じることの限りない祝福を味わわせてください。アーメン